

エール大学と私

私は、一九七二年七月、再度外務大臣を拝命して以来、すでに五回訪米している。日米首脳会談のために二度、一九七二年十月には日中国交正常化の経緯説明のため、一九七三年の九月には国連総会出席、そして最近では一九七四年二月の国際エネルギー会議参加のため等である。そしてその何れもが、重い荷物をかついでの旅で、心身ともにくつろいだ気持ちを楽しむことができないものではなかった。

ところが一九七四年五月の訪米は、ニューヨークのジャパン・ソサイエティの年次総会における講演と、エール大学から名誉学位（法学博士）を受けるためのものであった。当面、日米間に重苦しい問題や切迫した事件もなかったため、わずか五日間の滞米ではあったが、それは珍しく気軽に楽しいものであった。それに滞米中は終始快晴に恵まれ、存分に清潔な新緑を楽しむこともできた。

五月十八日(土)の午後ニューヨークについた私は、日本商工会議所主催のパーティーに出た後は、ようやく整備された総領事館の公邸でゆっくり休養をとることができた。沢木総領事夫妻は、ある素封家から買い受けることができた公館を誇りにしていたが、その内装には随分苦心していた。私達夫妻は、その新しい公館の客となり、総領事館の幹部夫妻と食卓を囲んで春の夜を心ゆくまで楽しんだ。

翌十九日(日)は、マンハッタン島を縦断して、ハドソン河に沿って北上し、途中で右折してニューヘブーンまで素晴らしいドライブをした。沿道は滴るような緑に覆われ、ドッグ・ウッドの花が咲き乱れていた。沿道の森や湖沼は静かで、その中に点在する住宅も、決して豪華なものではないが、緑に映えて美しく清潔でもあった。

途中、とある沼畔のレストランで簡単なピュッフェ形式の昼食をとった。天井の低い古い木造家屋で、どの調度も古いものばかりであった。何でも二百年程前にこの地に移住して来たイギリス人が建てた郵便局を軸として、次々に無造作に建て増して行ったものだという。日曜のことで、大勢の来客があったが、故トルーマン大統領もここによく見えたという。主人に案内されて地下室に入ってみると、沢山のブドウ酒の瓶が横倒しのまま無造作に積まれてある。その中で一番高価なものはこれだといって、手にとってみせてくれたが、たしか一九五一年のもので一本の

値は四百五十ドルという超ど級の逸品であった。ブドー酒は、年によってそんなに出来不出来があるようだ。

夕刻ニューヘブンの郊外の小さいホテルに辿りついた。ニューヘブンの街は、そこに所在するエール大学の卒業式に出席する父兄が全米はおろか全世界から集っており、ホテルというホテルは満員だったので、私選は郊外に止宿した。空はいよいよ高く、山はいよいよ青い。水はいよいよ清く、風は至極和やかで、郊外の景観は何とも素晴らしい。

夜はエール大学の総長夫妻招待の晩餐会があった。それより前、日本歴史の権威ホール博士のお宅でパーティーに招かれた。その席には、同大学の日本研究者と、日本人で同大学の教授をしている方々が同席されていた。そして故国日本のことや同大学の近況等に話はずんだ。

総長公邸での晩餐会には、今年、同大学で名誉学位を賦与されるものが招かれ、同大学出身のインガソール氏（元駐日米大使）夫妻も、私のためにわざわざ参加して頂いたのが嬉しかった。料理は、あくまでアメリカ流で極めて簡素なものであったが、軽いユーモアの中に素朴な善意が汲みとれて楽しかった。翌日は卒業式が盛大に挙行され、その卒業式において私どもに名誉学位が与えられるという。多少固くなっていた私も、その前夜祭ともいふべき晩餐会ですっかりくつろいだ気持ちをとりもどすことができた。

翌二十日（月）は、これまた快晴であった。午前十時過ぎ所定の場所に行ってみると、式の行なわれる大学内の広場にはすでに数千人の人が集っていた。私にとっては生まれ始めて始めてのガウンと房のついた角帽が用意されてあった。それを着用におよんで、音楽の調べとともに卒業式典のひな壇まで学生や父兄から祝福を受けながら、長い人垣の中を静かに歩いて行った。

まず総長の祈りから式が始まり、学部毎に修士号を得た卒業生の数と代表者の名前が読みあげられる。法、経、文、医、看護、工、理、音、芸等の各学部があり、二、三名にすぎない小さな学部もあるようであった。卒業生は、私どもと同様のガウンと角帽（但し房の色は違っていたが）を着ていた。自分の属する学部が読み上げられると、異様なかん高い声をあげて一同が起立し、代表者が壇上に進み出て卒業免状を受け取る。卒業生の中には白人も黒人も黄色人種もいる。代表者の中には女性もいれば東洋人も黒人もいるという状況で、なかなか多彩な情景である。

最後に名誉学位を受ける私ども一人一人が総長の前に進み出る。すると総長はその人に対して表彰状を読みあげ、学位の種類によって色のちがったうちかけのようなものを自からの手で私どもの肩にかけてくれる。壇下の教授、学生、父兄の間からわれるような拍手が湧く。おこそかであるが同時にアメリカ人らしく陽気なものである。私には法学博士を与えられたが、同時に他の

アメリカ人には法学の他、音楽、芸術、神学、文学、理学等の博士号が与えられた。

最近外国人で、この大学から学位を与えられた人の中には、西独のアテナウアー、ブランド両首相、国連のハマーシヨルド、ウ・タント両事務総長等がおられる。日本人では伊藤博文が名誉学位を与えられている。私に対して与えられた表彰状は、次のような文句で綴られてあった。私にとっては、身に余る望外の名誉であることは申すまでもない。この栄誉は、しかしながら、私に対してというよりは、日本と日本人に与えられたものであることは言うまでもないことである。ここに日米両国の友人に心から感謝したい。

(次頁に英文の表彰状を掲載する)

(昭、四九・五・三)

Citation

Yale University Commencement

May 20, 1974

Foreign Minister Masayoshi Ohira

In a world grown dangerously small and mutually dependent, you have had the burden of guiding the foreign policy of one of the world's most important powers. Patiently and persistently, you have worked to create an international harmony based on trust among nations. As your voice has sought calm in a world made tense by crisis, so your serenity in time of trouble has given new strength to the bonds of friendship between our two countries. Yale University is proud to confer upon you the degree of Doctor of Laws.